

英語フレッシュマンテストのリニューアルについて

－新版テストの作成と有効性の検証－

今村 洋美、柳 朋宏、野田 恵剛、山田 伸明、尾関 修治、伊藤 裕子、
近藤 健二、小栗 成子、Patrick Miller、Susan Gould、松浦 均

1 はじめに

中部大学では、長年にわたり入学式当日の午後、新入生全員を対象に英語フレッシュマンテストが実施されている。¹⁾ このフレッシュマンテストの結果は、全学開講科目のフレッシュマン英語、国際関係学部の英語IAおよび英語IBなどのクラス分けのデータや、入学生の英語力の推移などの教育データなどとして、幅広く活用されている。例えば、フレッシュマン英語では、新入生の到達度に応じた指導を効果的に行うため、フレッシュマンテストの結果に基づき、成績順に大きく3レベル構成のクラス分けを実施している。このクラス分けは、到達度の近い学生同士でグループを作ることを目的としており、レベル別に、全学統一の教科書を使用し、担当教員が各レベルに応じた指導を行っている。

しかしながら、新入生の英語力低下に伴い、1990年から2007年まで18年間使用されてきた英語フレッシュマンテスト（旧版テスト）では、平均点が毎年下がり続けていた。例えば、国際関係学部の平均点は、1990年には64.57点（100点満点中）だったのに対し、2007年には39.86点へと、18年間で24.71点もの下落が見られた。このため、今までのフレッシュマンテストでは、現在の新入生の英語力を細かく測り、クラス分けなどを適切に行うことが難しくなっていた。特に旧版テストでは、得点分布の中位層以下におけるクラス分けの精度が不足しているという実感があり、上記のような目的にあった精度を持つ新たなフレッシュマンテストの作成が必要であった。

そのため、現在の中部大学の入学生の英語力を適切に測ることができるような、英語フレッシュマンテストのリニューアル版（新版テスト）を、外国語教室と語学センターの英語教員が中心となって作成し、2008年度の英語フレッシュマンテストからこの新版テストを使用し、クラス分けなどに効果的に活用できるよう作業を進めてきた。本稿では、新版テストの作成過程を述べ、新版テストの実施結果、そして旧版テストと新版テストの結果の比較検討を行う。

2 新版テストの作成と実施

本節では、新版テスト作成から新版テスト実施までの過程について報告する。

2.1 旧版テスト問題内容検討

まず旧版テストの問題を再検討することから始めた。旧版テストは、大問6問、総問題数50問から成り、配点は各2点の合計100点ですべてマークシート方式である。その構成内容は、[I]が長文読解問題（No.1～No.8：計8問）、[II]が文法・語彙問題（No.9～No.16：計8問）、[III]が空欄補充問題（No.17～No.24：計8問）、[IV]が（少し短めの）長文複合問題（英文和訳および空欄補充）2セット（No.25～No.34：各セット5問、計10問）、[V]が英文整序問題（No.35～No.42：計8問）、そして[VI]が誤文訂正問題（No.43～No.50：計8問）となっている。

これらの問題構成を検討した結果、大きく3つの改善点が浮かび上がった。まず第1に、長文読解問題の比重が大きく、コミュニケーション能力を測る問題が少ないことが挙げられる。旧版テストの作成から20年近く経た今日、コミュニケーション重視の英語教育を受けてきた新入生の英語力を的確に測れるように問題の質を改善する必要がある。2番目の改善点は誤文訂正問題についてである。この種の問題は、TOEICのリニューアル版では廃止されており、我々の新版テストにも含めない方がよいと判断した。最後に、英文和訳の問題は、近年留学生や帰国子女が増えていることもあり、そのような入学生の英語力を測る際には必ずしも適切ではないと判断し、削除することとした。

2.2 新版テスト問題内容

旧版テストの内容を検討した結果を踏まえ、新版テストでは大問が4問の問題構成とした。ただし、実施運営および採点上、全体の問題数は50問のままとし、すべてマークシート方式で配点が各2点の合計100点である点は、旧版テストと同じとした。

構成内容は具体的には、[I]が会話文空欄補充問題2セット（No.1～No.10：計10問）、[II]が文法・語彙問題（No.11～No.30：計20問）、[III]が空欄補充問題

(No.31～No.35：計5問)、そして[IV]がリーディング問題5セット(No.36～No.50：計15問)とした。

旧版テストでは、長文読解問題から始まっていたため、ここで難しいと感じた入学生の中には後半の問題を解くのが嫌になった者もいたはずである。そこで新版テストでは、比較的簡単な会話文問題から始め、リーディング問題は最後に配した。しかもリーディング問題は、旧来の長文読解問題形式ではなく、図や表とそれに関する解説文から必要な情報を素早く読み取る能力を測る問題や、手紙やEメール形式などの実践的な短めの英文を用いた問題とした。そうした問題を5種類組み合わせ、短めで簡単な問題から長めで難しい問題へと配していった。

2.3 新版テスト試作

前節で述べた問題内容で、新版テスト試作問題を作成し、国際関係学部の2007年度の入学生で英語IBを受講している59名(5クラス)に、この試作問題を実際に解いてもらった。

平均点や正答率などを検討した結果、試作問題では、全体に簡単な問題の割合が大きかったため、全体の平均点が71点と高くなりすぎた。そこで、正答率が高くなりすぎた問題の一部を修正したり他の問題と入れ替えるなどして修正版を作成し、再度学生に解いてもらった。

その結果、修正版では、全体の平均点が60点になった。しかも各問題の正答率も約90%から25%までとなり、ほとんどの学生が解ける問題からかなり難しい問題までを満遍なく組み合わせた、本学の学生の英語力測定に適した新版テストに仕上げることができた。

3 テスト結果について

本節では、2007年に実施された旧版英語フレッシュマンテスト(旧版テスト)の結果と2008年に実施された新版英語フレッシュマンテスト(新版テスト)の結果を報告する。3.1節では、旧版テストと新版テストの受験者全体のまとめと得点の分布、学部・学科別の平均点について報告し、3.2節では、国際関係学部の1年生に対して実施した両テストの比較を行う。

3.1 旧版テスト・新版テストの結果

2007年4月に実施された旧版テストと2008年4月に実施された新版テストの全受験者の結果をまとめたものが表1である。2節で述べたように、問題数は、旧版テスト、新版テストとも50問で、1問2点の100点満点のテストである。

表1 旧版テストと新版テストの結果

	旧版テスト	新版テスト
受験者数	2024	2220
平均点	40.40	51.11
最頻値	42	40
中央値	40	50
最高点	92	98
最低点	2	2
標準偏差	13.18	16.31

旧版テストの平均点は40.40点、標準偏差は13.18、最高点は92点、最低点は2点であった。一方、新版テストでは、平均点は51.11点、標準偏差は16.31、最高点は98点、最低点は2点であった。新版テストの平均点が旧版テストに比べ、10点上上がっていることが分かる。また、標準偏差の違いから、得点のばらつきは広がったことが分かる。

次に、旧版テストと新版テストの得点分布を見てみよう。図1は旧版テストの、図2は新版テストの得点分布である。それぞれのグラフは、得点を20点毎に区切っている。

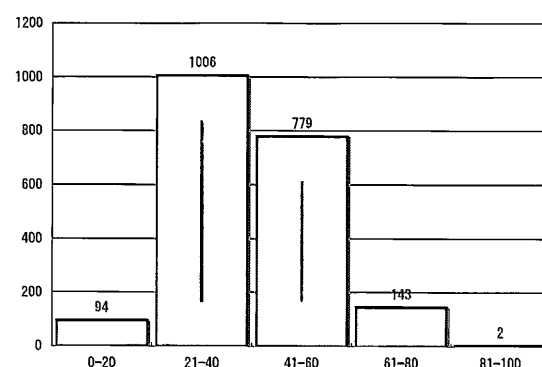


図1 旧版テストの得点分布

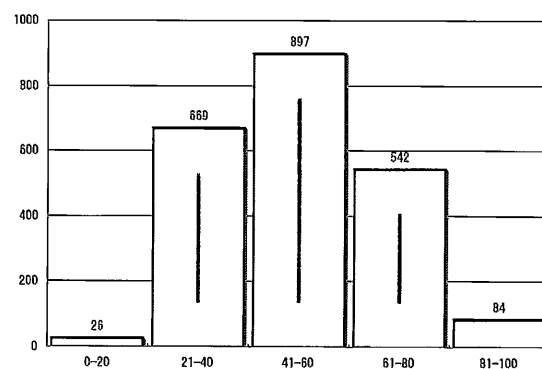


図2 新版テストの得点分布

図1ではグラフ全体が左側に歪んでおり、得点の中位層以下に分布が集中しているのに対し、図2では41-60点を中心にほぼ対称に分布しているのが分かる。表1の平均点の変化と上記2つのグラフから、新版テストは、単に平均点を上げるためにテストの難易度を下

げただけでなく、その得点分布から、クラス分けテストとしての役割を十分果たしているといえるだろう。

では、学部・学科別の平均点を見てみよう。各学部・学科の平均点、標準偏差、受験者数をまとめたものが表2である。

表2 旧版テストと新版テストの学部・学科別平均点

テスト・項目 学部・学科	旧版テスト (2007)			新版テスト (2008)		
	平均点	標準偏差	受験者数	平均点	標準偏差	受験者数
工学部	38.12	11.99	796	48.74	15.28	762
機械工学科	39.34	12.06	207	51.89	15.62	178
電気システム工学科	37.61	11.75	88	45.73	14.25	103
電子情報工学科	36.45	12.20	97	45.51	12.72	77
都市建設工学科	33.97	11.68	60	46.86	14.28	49
建築学科	37.16	11.44	148	47.32	15.91	142
応用化学科	39.78	13.44	64	51.44	16.43	89
情報工学科	39.94	11.41	132	49.15	14.99	124
経営情報学部	36.67	12.09	300	46.02	14.89	327
経営情報学科	37.57	12.20	154	46.22	14.73	182
経営学科	35.71	11.93	146	45.78	15.14	145
国際関係学部	39.86	13.67	102	53.59	17.23	113
国際関係学科	40.70	13.85	57	53.41	16.87	58
国際文化学科	38.80	13.51	45	53.78	17.77	55
人文学部	39.34	13.54	346	49.59	16.30	386
日本語日本文化学科	39.00	14.86	84	48.15	17.75	96
コミュニケーション学科	37.56	12.45	73	45.17	15.85	82
心理学科	40.53	13.06	98	53.51	15.92	106
歴史地理学科	39.80	13.68	91	50.41	14.73	102
応用生物学部	45.69	12.72	307	54.19	16.72	287
応用生物化学科	45.57	12.63	116	55.98	17.47	88
環境生物科学科	46.17	12.19	120	52.50	16.23	108
食品栄養科学科	45.07	13.87	71	54.46	16.54	91
生命健康科学部	50.42	12.53	173	61.04	15.57	208
生命医科学科	46.44	12.50	45	58.74	15.85	86
保健看護学科	51.81	12.29	128	62.66	15.23	122
現代教育学部	---	---	---	57.20	16.01	137
幼児教育学科	---	---	---	57.29	15.02	86
児童教育学科	---	---	---	57.14	17.69	51
全 体	40.40	13.18	2024	51.11	16.31	2220

両テストの平均点を学部・学科毎に比べてみると、すべての学部・学科（但し現代教育学部は除く）で点数が上昇していることが分かる。上昇の幅は学部・学科によって異なり、環境生物科学科の6.33点から国際文化学科の14.98点までの幅がある。

このような平均点の上昇が受験者の違いによるものであるのか、あるいはテストの違いによるものであるのかを検証するため、次節では国際関係学部の1年生

に対して実施した両テストの結果を比較する。

3.2 旧版テストと新版テストの比較

本節では、旧版テストと新版テストの両テストを受験した学生の得点比較を行う。2008年度入学の国際関係学部の1年生で、地域言語科目として英語を選択している学生を対象に、旧版テストを実施した。旧版テストの受験者数は82名で、平均点は40.41点であった。

この点数は2007年度に実施された旧版テストの全受験者の平均点とほぼ同じである。また、新版テストの平均点は、国際関係学部全体では53.59点であったが、比較の対象とした学生のみ平均点は55.51点であった。旧版テストと新版テストの両方を受験した学生だけで平均点を比べてみても、新版テストで約15点上昇しており、表1で見た平均点の違いは、受験者の違いではないことが分かる。

平均点の他、表1と同じ項目について、国際関係学部1年生による両テストの結果をまとめたものが表3である。また、両テストの得点分布をまとめたものが図3である。

表3 国際関係学部1年生による両テストの結果

	旧版テスト	新版テスト
受験者数	82	82
平均点	40.41	55.51
最頻値	32	60
中央値	38	57
最高点	84	96
最低点	16	14
標準偏差	15.45	18.16

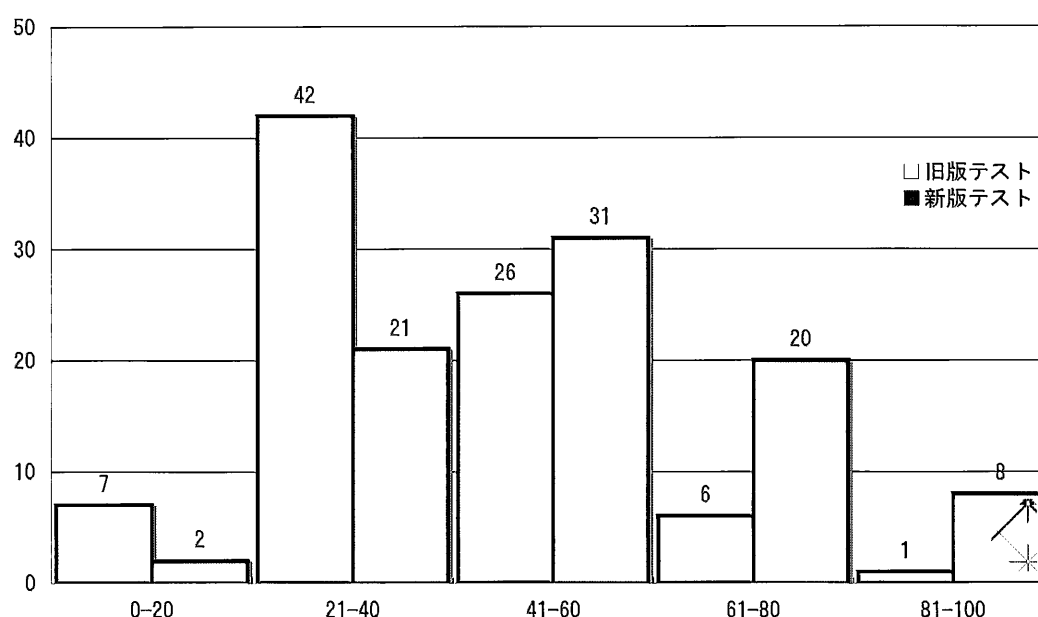


図3 旧版テスト・新版テストの得点分布

図3では、左側が旧版テストの結果、右側が新版テストの結果である。図1と図2で見たのと同じように、旧版テストではグラフが左側に歪んでおり、中位層以下に得点の分布が集中しているのに対し、新版テストでは41-60点を中心に左右でほぼ対称に分布していることが分かる。このことから、クラス分けテストとして利用するのに適したテストとなったことが確認できる。

最後に、各学生の旧版テストの得点と新版テストの得点との対応を見ることにする。旧版テストの得点をX軸、新版テストの得点をY軸としてまとめたものが図4である。旧版テストで20-40点付近にいる被験者の得点は、新版テストでは広く分散していることが分かる。また、全体的な傾向としては、ばらつきはある

ものの、旧版テストで得点が高い者は、新版テストでも得点が高い傾向にあると言える。実際、旧版テストと新版テストとの間に相関関係があるかどうかを調べた結果、相関係数は $r=0.842$ となり、有意水準0.1%で有意であった。この数値から、旧版テストと新版テストとの間にはきわめて高い（＝ほぼ完全な）相関関係があることが分かった。

以上のことから、新版テストは、旧版テストとの相関を保ちつつ、分散が大きくなっており、1節で述べた目的に合わせたクラス分けテストとしての精度を上げることができたと結論づけることができる。

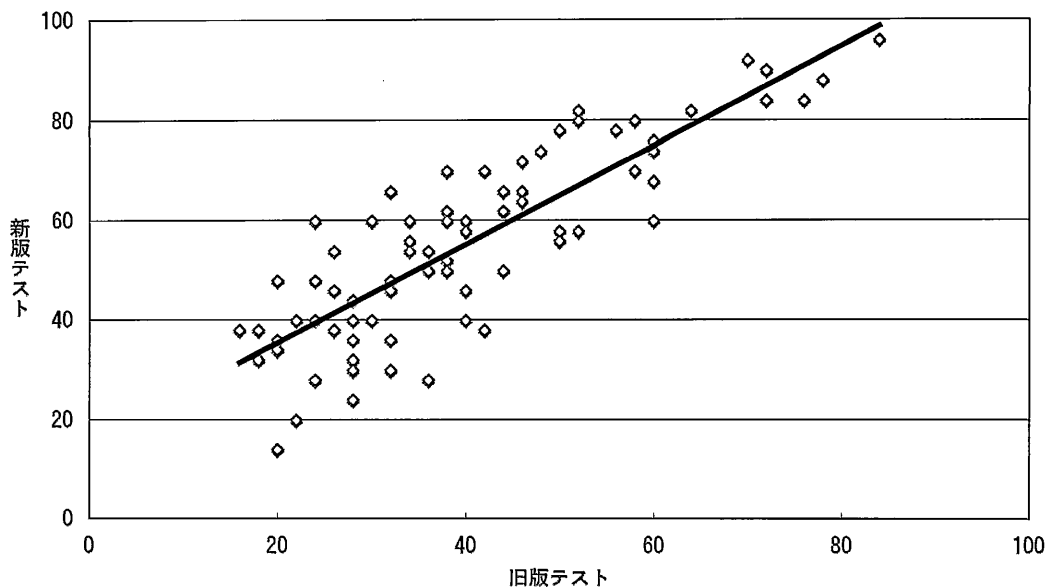


図4 旧版テストと新版テストの対応関係

4 おわりに

本稿では、英語フレッシュマンテストの新版（新版テスト）の作成の経緯、新版テストの実施結果、そして旧版テストと新版テストの結果の比較検討について述べてきた。特に、新版テストは、現在の中部大学の新入生の英語力を的確に測ることができること、また、旧版テストと新版テストはほぼ完全な相関関係があることを示した。

今後は、この新版テストが英語フレッシュマンテストとして利用され続け、その結果は新入生の英語のクラス分けなどのデータとしてだけでなく、中部大学の教育全体に役立つ資料としても大いに活用されることを願っている。

謝辞

今回の英語フレッシュマンテストの新版作成・実施に際し、教務課長の吉田浩隆氏をはじめ教務課のスタッフの方々から、旧版テストのデータの提供や新版テストの実施とそのデータの提供などの面において、多大なるご協力を賜りました。この場を借り厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 英語英米文化学科に限っては2002年から、新入生にTOEIC IPテストを実施するのに伴い、英語フレッシュマンテストは受験していない。

教 授	国際関係学部	外国語教室	今村洋美
准教授	国際関係学部	外国語教室	柳 朋宏
教 授	国際関係学部	外国語教室	野田恵剛
教 授	国際関係学部	外国語教室	山田伸明
教 授	国際関係学部	外国語教室	尾関修治
准教授	国際関係学部	外国語教室	伊藤裕子
教 授	語学センター		近藤健二
教 授	語学センター		小栗成子
准教授	語学センター		Patrick Miller
講 師	元語学センター		Susan Gould
教 授	三重大学	教育学部	
客員教授	中部大学	大学教育研究センター	
			松浦 均